

# 宮崎家の女性たち

special close up

日本や世界を変えようと奔走した宮崎家の男たち。彼らが革命にまい進することができた裏側には、力強い女性たちの存在があった。革命成功を陰で支えた彼女たちは、どのように生きたのか。



宮崎ツチ (滔天の妻)  
(1871~1942)



宮崎サキ (兄弟の母)  
(1829~1909)

サキは現長洲町近郊の素封家、永屋家の長女として生まれ、長蔵との間に八男三女をもうけた。武芸者であった夫・長蔵の気風を受け、「畳の上で死するは男子なよりの恥辱なり」と子どもたちに語って育てたという。

また、民蔵・彌蔵・滔天が、革命を成し遂げるために日清戦争の徴兵を逃れる方法について話しあっていたのを聴きつけ、「百姓の子までお国のためにと喜んで征くのに、己の子ではない。この家の子ではない。お

前らを追い出して割腹し、ご先祖父上に申し訳する。出ていけ！」と、怒りに打ち震えて激しく泣き崩れたという。兄弟が、戦争に行くのではなく、それぞれの目標を達し人のために働くことでお国の役に立つのが目的であることを告げると、サキは「それで安心した。例えそのことで国賊の母と嘲り罵られても我慢する」と言い切ったという。郷土として、宮崎家の人間としての誇りを子どもたちに身を持って論じた人物である。

ツチは現玉名市天水町の豪農、前田案山子の三女として生まれた。姉で二女のツナは夏目漱石の「草枕」のヒロイン・那美のモデルであることが知られている。

前田家は民権運動のメッカであり、その家風を受け育ったツチは岸田俊子(女権拡張運動家・作家)が前田家を訪れた際、11歳で「学問ヲ勸ム」の題で演説をしたという。梅花女学校(現大阪市の梅花学園)などで学び、早朝の有明海の砂浜を、裸馬に乗って駆けることを日課にしていたという女性でもあった。

滔天と恋愛結婚で結ばれた後は、生活に追われながら革命資金を調達する

ことに明け暮れた。滔天に家計の相談をしても「革命のための金は出来るけれども、妻子を養ふ金は出来ない」と顧みなかったため、ツチは下宿屋や石炭販売、石灰販売などを営んだがいずれも上手くいかなかった。

1897(明治30)年、孫文が宮崎家に滞在した際は、ミイとともに「刺身や味噌汁や煮肴や、お寿司や鰻や、出来るだけの努力を払って、ありつたけのご馳走をしました」と回顧している。

志を遂げようと奔走する夫・滔天に尽くし続けたツチであるが、そのさまは、同士の一人であったとも言えるのではないだろうか。



宮崎燐子  
(柳原白蓮／滔天の長男・龍介の妻)  
(1885～1967)



宮崎ミイ (民蔵の妻)  
(1873～1972)

ミイは、三池村(現大牟田市)に立花家の次女として生まれた。立花家は柳川藩家老で、ミイの兄・小一郎は、民蔵が学んだ銀水義塾の塾長であり、民蔵と親しかった。弟の滔天が先に結婚し、急かされていた民蔵は「あてがある」と自ら立花家に出向き、ミイとの結婚を決めて来たエピソードが残っている。

宮崎家に孫文が滞在した際、民蔵は欧米見学旅行中で留守であり、滔天の妻・ツチとともに孫文をもてな

した。また、1910(明治43)年、大逆事件の容疑が民蔵に掛かったとき、民蔵は京城(現ソウル)にいて不在にしていたため、ミイが代わりに取り調べを受けている。

革命と生活に必要な資金を得るため、醬油屋や牛乳屋を開業するも失敗。革命資金のために借金を重ね、田畑が何重にも抵当に入り、ミイが債権者に囲まれることも多々あったという。当主・民蔵が留守がちにする中、ミイが宮崎家を支えたといえる。

「筑紫の女王」と讃えられた燐子は、伯爵・柳原前光の妾腹の子として生まれた。前光の妹は大正天皇の生母にあたり、大正天皇と燐子はいとこ同士にあたる。

16歳で北小路資武と結婚させられるも21歳で離婚。27歳のとき25歳年上の炭鉱王・伊藤伝衛門と再婚。金で買われるような結婚であったというが同時に「筑紫の女王」とも呼ばれた。燐子は北小路家から離婚したのち、歌人で国文学者の佐々木信綱に師事し、歌人として知られるようになった。伝衛門との結婚後の1918(大正7)年に雑誌「解放」

に発表した戯曲「指鬢外道」を通じて知り合ったのが宮崎龍介、滔天の長男である。

1921(大正10)年10月23日の朝日新聞に燐子から伝衛門への絶縁状が公開された。燐子は龍介とともに駆け落ちしたのである。姦通罪があった当時、命がけであった。その後離婚が成立し、燐子は龍介と結婚した。

燐子の白蓮としての著書には歌集、戯曲、小説、自叙伝があり、龍介が結核に倒れた時は燐子の家計を支えた。晩年は視力を失ったが、龍介の介護のもと穏やかで幸福な生活を送ったという。